安芸高田 歴史紀行

あの日の記憶は写真の中にⅡ［4］

安芸高田市歴史民俗博物館
学芸員　古川 恵子

「刈田北小学校」

（八千代町土師）
大正６（1917）年

刈田北小学校は、明治10（1877）年に土師小学校として開校しました。写真は明治41年に建てられた校舎です。

柵の前に立つ着物の女性と学生服の男性の6人が先生で、畑で作業をしているのが生徒のようです。当時の学校名は刈田北尋常小学校といい、「八千代町郷土誌」（昭和44年）にはこの年の学級数が4、職員4名児童数は184名と記されています。

わかりづらいのですが、玄関の左右には学校名を書いた看板が掛かっており、左のものには「刈田北農業補習学校」とあります。農業補習学校とは、この頃小学校に付設して小学校卒業者などを対象に農業のほかに修身や国語・算術を教えていました。もしかするとこの写真に写っているのは児童が下校したあとに行われた農業補習学校の授業風景かもしれません。

刈田北小学校は、土師ダムの建設に伴って刈田小学校と統合が決まり、昭和46（1971）年3月24日に廃校、94年の歴史を閉じました。

市長コラム vol.102

「マイ・プライベート・タイム」を通じて思うこと

以前はゴルフに専念していましたが、市政に携わる身になってからは、時間を他人に合わせることが困難となり、最近は読書と散歩がマイ・プライベート・タイムであります。特に散歩は、毎日の日課となりました。安芸高田市の四季折々の風景は心を癒してくれます。古くからこの地方に伝わる「もやい」による地域の助け合いでの田植えの協働作業や、ボランティアによる地域の清掃活動、伝統芸能の神楽・田楽行事等によって、地域の皆様との素晴しい出会いが生まれ、大変楽しい散歩が出来ます。さらには、地域の実情を把握・実感する事が出来ます。こうした地域の実態を把握することが、地方行政の原点だと思います。この事を踏まえ、住民の皆様に満足して頂ける施策を展開することが出来ると確信しています。

家屋が点在する中山間地域では過疎化が進み、従来のバス路線を活用した交通体系の確立が困難な状況にあります。高齢化により、自宅からバス停までの移動も大変困難であります。そこで、市では通院・買い物・文化活動などに幅広く活用できる、ドア・ツー・ドア（自宅から目的地まで）の新交通システム「お太助ワゴン」を構築しました。低料金で移動が出来るシステムとして、好評であります。

少子高齢化が著しい本市《高齢化率38．1％（平成29年3月1日現在）》では、将来にわたって高齢者を支える仕組み作りが課題であります。市には古くから「もやい」の風習があります。田植えをする時、皆がより合って田植えをし、自分の田植えが終わったら手伝ってくれた人の田植えをする。金銭で清算するのではなく、手伝い合う事で清算をする近所の助け合いの仕組みが「もやい」です。私はこの仕組みを活かして自助・共助の理念のもと「市民総ヘルパー構想」を提唱しました。この構想は全ての市民の方が、防災機器の使用方法や介護知識を事前に習得され、一人一人が地域で活躍して頂き、行政サービスの補完をして頂くものです。市民の皆様にご理解を頂くには時間がかかりましたが、最近では自分のこととして理解して頂くようになりました。このことにより、市民の皆様の協力を得る事ができ、防災・福祉分野などの行政コストを削減する事が出来ました。

少子高齢化社会において、将来にわたって人材を確保することは、大変重要な課題であります。私は、「人種差別」「男女差別」の解消に取り組むと同時に、「多文化共生社会の実現」と「男女共同参画社会の実現」がこれからの人材の確保に大切だと考えています。中山間地・安芸高田市での農業・介護等の従事者の人材確保は深刻な課題であります。そのためには、女性が活躍できる社会づくりや外国人の皆様の助けが必要であります。女性の活躍社会を実現するには、家族・地域・職場の環境づくりが必要であります。また、外国人の方に日本で快く就労して頂くためには、宗教や食文化を含む生活様式を理解していくことが大切であります。市では将来、必要な人材を確保する為に、他の自治体に先駆けて「人権多文化共生推進課」を設置し、多文化共生事業・男女共同参画事業の推進を図っています。

●題字：安芸高田市長　浜田一義